本文章已註冊DOI數位物件識別碼

airiti Library

時間副詞に関する一考察－「ついに」と「とうとう」を中心に

A Study on Time Adjectives: "Tsuini" and "Toutou"

doi:10.29736/DWRYJYSB.200901.0004

東吳日語教育學報, (32), 2009

作者/Author： 江雯薰(Wen-Shun Chiang)

頁數/Page： 81-110

出版日期/Publication Date：2009/01

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29736/DWRYJYSB.200901.0004

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

東吳日語教育學報第 32 期
2009 年 1 月，頁 81-109

關於時間副詞的考察之一
—以「Tsuini」「Toutou」為中心—

江雯薰

淡江大學日本語文學系助理教授

中文摘要

本稿的目的是考察「Tsuini」「Toutou」這兩個副詞的意思和用法。其結果是：對使用這兩個副詞的句子來說「時間限定性」，而對句子中的述語來說「運動性」「界限性」是必要的；以時間限定性的觀點來看的話為表示在現實發生的事情；以現實性的觀點來看的話為表示實際發生的事情等等。在意思的特徵上，這兩個副詞在「因文脈，補助詞所引導的最後局面」這個意思上是相同的，但是在「「Tsuini」是強調最後局面，「Toutou」是強調到最後局面的過程」及「「Toutou」比「Tsuini」有著費盡時間・勞力等這樣心理態度」這兩點上是不同的。而從此可以得知：使用「Toutou」時，在前面的過程中會出現引導出最後局面的前兆這件事。

關鍵詞：「Tsuini」，「Toutou」，**時間副詞**，**時間限定性**，**最後局面**

airiti

時間副詞に関する一考察

―「ついに」と「とうとう」を中心に―

江雯薫

淡江大学日本語学科助理教授

格式化: 字型: (中文) 新細明體, (中文) 中文 (台灣)

註解 [U1]: 字体不一、我已改成「ゴシック」字体

格式化: 字型: (英文)標楷體, (中文)標楷體, 字型色彩: 黒色

格式化: 字型: (英文)標楷體, (中文)標楷體, 字型色彩: 黒色

要　旨

本稿の目的は，「ついに」「とうとう」の意味・用法を考察することである。その結果，両語を用いる文には時間的限定性が，述語には「運動性」「限界性」が必要であること，時間的限定性の観点からはアクチュアルな事態を，レアリティーの観点からは，レアルな事態を表すことなどが明らかになった。

意味的な特徴では，両語のどちらも，文脈，補語によって導かれた最終局面を表すことで共通しているが，「ついに」は最終局面を，「とうとう」は最終局面に至るまでのプロセスを強調すること，多大な時間・労力がかかるという心的態度は「ついに」より「とうとう」のほうが強く感じさせることで異なっている。そこから，「とうとう」によって表されるプロセスには，最終局面に導く何らかの兆しがある，という違いが出てくる。

キーワード：「ついに」，「とうとう」，時間副詞，時間的限定性，最終局面

airiti

A Study on Time Adjectives: "Tsuini" and "Toutou"

CHIANG Wen-Shun

Associate Professor, Department of Japanese Tamkang University

Abstract

The purpose of this study is to investigate the meanings and usages of time adverbs "Tsuini" and "Toutou". Our findings are as follows: if we use these two adverbs to create a "limited time" sentence, the predicate will need to include motion and telicity; from a limited time perspective, these adverbs can be used to describe actual events that have happened; from a reality perspective, they can be used to describe tangible incidents.

Looking at the characteristics of these two adjectives' meanings, we can see that they both express the endpoint that the complementizer leads up to in context; however, the two differ in that "Tsuini" stresses the endpoint itself, whereas "Toutou" puts emphasis on the entire development toward the endpoint, and compared to "Tsuini," "Toutou" has a stronger connotation of "exhausting of one's time/labor." This brings to the point that when "Toutou" is used, hints toward the endpoint will be evident in the events leading up to the finish.

Key words: "Tsuini", "Toutou", time adjectives, a limited time, the endpoint

airiti

時間副詞に関する一考察
―「ついに」と「とうとう」を中心に―

江雯薫

淡江大学日本語学科助理教授

註解 [U2]: 字体不一

格式化: 字型: (英文)標楷體, (中文)標楷體, 字型色彩: 黒色

格式化: 字型: (英文)標楷體, (中文)標楷體, 字型色彩: 黒色

1. はじめに

現代日本語において，「ついに」「とうとう」「やっと」「ようやく」は，「事態が起きるまでに時間がかかる」ことを表す点で，時間副詞として扱われている語である。この四つの語は，(1)のように互いに置き換えることができる。

(1) 大戸はデビュー第一戦に一回でノックアウトされた。その相手が金子ジムの長岡だったのだという。すぐに雪辱戦を行なったがそれも一回でノックアウト。三戦目は引分け。四戦目に，ようやく｛○やっと／○ついに／○とうとう｝長岡をノックアウトで破ることができた。（一瞬）

(1)は，「大戸は第一戦，第二戦，第三戦を経て，結局第四戦でノックアウトで長岡を破った」ということを表す。この四つの語はいずれも用いることができ，「進行してきた物事が，様々な過程を経て最終的にまとまりをつける」という意味的な特徴を持っていると言える。この特徴を持っているこの四つの語は，仁田（2002）では，「起動への時間量」を表す時間副詞で，「長期所要型」に属するもの（「事態が長期の時間的経過を経て，起動し実現したと捉えられていることを表しているもの」）とされている。

airiti

ところで，この四つの語は，(2)のように「の＋体言」が後接できるかどうか，(3)のように否定表現が文末にくるかどうかから見ると，次のようになる。

(2)　彼は｛○ようやく／○やっと／＊ついに／＊とうとう｝のことで彼女に告白した。（作例）

(3)　三時間も待っていたが，彼女は｛＊ようやく／＊やっと／○ついに／○とうとう｝来なかった。（作例）

(2)では，体言は「ようやく＋の＋体言」「やっと＋の＋体言」という形[1]で，「ようやく／やっと」と共起することができる。また，否定表現との共起をみると，「ようやく／やっと」は，(3)のように共起しにくい[2]。このことから，「ようやく／やっと」は実現しなかったことを表しにくいと言える。このようにみると，この四つの語を「ようやく／やっと」と「ついに／とうとう」にグループ分けすることができると言える。

本稿では，紙幅のため，この四つの語の中で，「ついに／とうとう」を対象にして考察する[3]。一方，「やっと／ようやく」については別稿で考察を行うことにする。

註解 [U3]: 我已將此部分字的大小由 9 改成 10.5

格式化: 字型: (英文)Times New Roman, 字型色彩: 自動

格式化: 預設段落字型, (中文) 日文, 非隱藏

格式化: 字型: (英文)Times New Roman

格式化: 間距 套用後: 0.5 行

格式化: 字型色彩: 自動

1　「ようやく＋の＋体言」と「やっと＋の＋体言」の実例数をみると，「ようやく＋の」は 10 ~~（我已將此部分字的大小由 10.5 改成 9）~~例，「やっと＋の」は 41 例あった。このことから，「ようやく＋の」は「やっと＋の」より言いにくいと言える。また，「やっと＋の」の場合は「やっとの思い」などの例もあったが，「やっとのこと」の形で用いられている例が，23 例と最も多く全体の 56.10%に及んでいた。

2　「ようやく」は 576 例中，「やっと」は 496 例中，否定表現と共起する例は一つもない，ということから，「ようやく／やっと」は否定表現と共起しにくいと言える。

3　「ついに」と「とうとう」を形態的にみると，次の(1)のように「は」は「ついに」にはつくことはできるが，「とうとう」にはつくことはできない。本稿では，「ついには」については対象外とする。

(1)　いくら罵ってみても差はつまらず，ついには｛＊とうとうは｝ひとり取り残されることになってしまった。（一瞬）

airiti

airiti

2. 先行研究

時間副詞について体系的に記述している仁田（2002）では，「ついに」と「とうとう」は，「起動への時間量」を表す時間副詞で，「長期所要型」に属するもの（「事態が長期の時間的経過を経て，起動し実現したと捉えられていることを表しているもの」）とされているが，両語の相違点に関する指摘はなされていない。一方，両語を類義語として意味的に考察してきた先行研究には，長嶋（1982），森田（1989），飛田・浅田（1994），福島（1997），グループ・ジャマシイ（1998），池田（2000），李（2000），金（2006）などがある。各研究は，焦点の置き方，否定表現を伴うかどうかなどの観点からみると，次のようになる。

どこに焦点を当てるかについては，長嶋（1982）は，「ツイニは，トウトウに比べて，ある〈事態〈状態〉の実現の瞬間に注目する〉のに対し，トウトウは，〈事態（状態）が実現する過程に注目する〉と言えよう。」としている。同じことは，森田（1989），飛田・浅田（1994）でも言及されている[4]。長嶋（1982）では，「トウトウには，いわば「紆余曲折を経て」といったニュアンスが伴う。」ということも述べられている。このことは，森田（1989），飛田・浅田（1994），福島（1997），グループ・ジャマシイ（1998），李（2000），金（2006）でも説明され

格式化: 分散對齊

格式化: 字型: (中文) 新細明體, (中文) 中文 (台灣)

格式化: 分散對齊, 間距 套用後: 1 行

格式化: 縮排: 第一行: 0 字元

4 森田（1989）では，「ついに」について，「「ついに」によってとらえられる行為・作用は，その成立が瞬間的なものとして把握されている。」と述べられている。一方，飛田・浅田（1994）では，「ついに」について，「長い時間やさまざまの事柄を経過して，期待される新しい局面に事態が入ったというニュアンスで，到達点にポイントがある表現である。」と述べられているが，「とうとう」について「最終的な局面に至る経過にポイントがある。」と述べられている。

airiti

ている[5]。

否定表現を伴うかどうかからみると，森田（1989）は「ついに」について，「成立しそうでなかなか成立しなかった行為や作用が，一定の時間的範囲の中で成立または不成立に終わったこと。」と説明している。このことは，森田（1989）以外に，飛田・浅田（1994），福島（1997），グループ・ジャマシイ（1998），李（2000），金（2006）でも言及している[6]。それに対して，「とうとう」については，グループ・ジャマシイ（1998）は「期待されていた事態が，最後まで実現しなかった場合に使う。」と述べている。

心的な態度の有無からみると，「ついに」については，森田（1989）は，「客観的状況の叙述として多く用いられる。」とし，福島（1997）は，「ついに」は「事

5　森田（1989）では「いろいろの過程を経て最後にその事態に至るという過程意識を踏まえる」のように，飛田・浅田（1994）では，「長い時間やさまざまな事柄を経過して，最終的な局面に到達する様子を表す」のように，福島（1997）では「事態が成立に向かって徐々に近づくという過程を経て，最終的にそれが成立する様子を表す」のように，李（2000）では「「ついに」は実現した瞬間に重点が置かれている（結果重視）のに対して，「とうとう」は実現するまでの過程に重点が置かれている（過程重視）」のように，金（2006）では「「とうとう」の場合は，ある事態が終結に至る，その経過や過程に重点が置かれ，「ついに」の場合は，最終的な到達に焦点が当てられる」のように述べられている。また，グループ・ジャマシイ（1998）では「長い時間をかけて，または最後的に何かが実現することを表す。」とし，またそれは，「長い時間や経過を経て，予想されていた最後の段階に至った場合」，「長い時間をかけて努力してその結果に至った場合」，「それまで保っていた状態が限界を越えてしまった場合」に用いられていることが述べられている。

6　飛田・浅田（1994）は「後ろに完了の打消しの表現を伴って，実現しない状態が現在まで続く様子を表す。」とし，福島（1997）は「未実現のままで保持・継続されていた事態が決定的な結末に転じたり，それが未実現のまま決定的な結末として成立する様子を表す。」とし，グループ・ジャマシイ（1998）は「話し手の期待や予想が，最後まで実現しなかった場合に使う。」とし，李（2000）は「「やっと」「ようやく」は，その事態・状態が話し手にとって「望ましいこと」でなければならない。したがって，下に打消しの言い方を伴うことはない。これに対して，「ついに」「とうとう」はこの点についての制限を受けない。」とし，金（2006）は「打消を伴って，あるいは肯定形式の場合でも内容的にある事態が成立しない，非現実を表す。」としている。

airiti

態の成立を感情的にではなく，理性的にとらえた表現である。」としている。それに対して，「とうとう」については，森田（1989）は「ついに，きたるべきものがきたという意識から，それに伴う決意，覚悟，あきらめ，歓喜などの感情が強くにじみ出る。」とし，福島（1997）は「多くの場合，回避願望を抱きつつも絶望感が増し，最悪の状態に至った様子を表し，あるいは，成就への不安を経験しつつも，最終的に事態の成立に至った様子を表す。」としている。また，グループ・ジャマシイ（1998）は「そこに至るまでのできごとや歳月に対しての話し手の感慨がこめられる。」とし，池田（2000）は「～テシマウと共起することが比較的多く，その場合は残念だとか，しなければよかったという後悔の気持ちを強調することになる。」，「話し手の気持ちとより結びついた表現だ。」としている。

以上の先行研究から，「ついに」「とうとう」は長い時間やさまざまな事態を経て，最終的な局面に入ったこと，打消し表現を伴う場合は期待されていたことは最後まで実現しなかったこと，心的態度からみると，「とうとう」は「ついに」より感情的に捉えられていることで共通しているが，「ついに」は事態が実現する到達点に，「とうとう」は事態が実現するまでの過程に焦点を当てる，という点で異なっている，と言える。

このようにみると，両語の違いは，先行研究では意味的な特徴という観点からの説明が多いことがわかる。また，事態が実現するまでの過程に焦点を当てるかどうか，ということが，両語の相違を明らかにするには重要なポイントである，ということも書かれている。だが，次の(4)のような例を見られたい。

(4)　伍堂がそれに対してすぐ返事をしなかったので，一層妙な空気になった。伍堂は公子と，そして千果はとうとう｛○ついに｝高倉と二人になった。千果は高倉と並んで歩きながら，この期を逃してはならぬ，という緊張と焦慮で胸が騒いでならなかった。（華燭）

(4)では，「とうとう」を「ついに」に置き換えることができるが，ニュアンス

airiti

的にみると多少違うところがある。それは，「とうとう」を用いると，「二人になって何かしたいことがある。二人になることが最終目的ではなく，二人になって何かをしたい」という読みが取れるが，「ついに」を用いると，「二人になることが最終目的である」という読みになる。

このようにみると，先行研究では言及されていないところをどのように説明すればよいのかを明らかにする必要があると言える。

本稿では，先行研究に基づいた上で，時間的限定性[7]，アスペクト，モダリティといった観点から，文末における述語の特徴を取り上げ，また両語の置き換え[8]を手掛かりとしてその意味的な特徴を考察し，両語の異同性を明らかにすることを目的とする。

3. 文末の述語について

3.1　時間的限定性の観点から

「ついに」「とうとう」の文末にくる述語について，形容詞，名詞，動詞に分けてみると，次のようになる。

7　「時間的限定性」について，工藤（2002）は，「〈時間的限定性〉はすべての述語を捉えているカテゴリーで，アクチュアルな偶発的な〈現象〉か，ポテンシャルな恒常的な〈本質〉かの違いである。これは時間的であるとともに，〈現象〉は〈知覚〉でき，〈本質〉は〈思考による一般化〉があることから，発話主体の確認のしかたの違いとも相関する。」と述べている。

8　「ついに」「とうとう」の異同性を明らかにするため，両語の置き換えをアンケートによって行った。そのアンケートは，ネイティブスピーカーを対象にして行ったものである。その調査は，主に岡山大学・就実大学・清心女子大学の在学生に依頼し，回答を得たものである。回答者の平均年令は 22 才で，各項目につき，約 40 人の回答で構成したものである。また，置き換えを行う際，＊と判定する場合，二つのことを意味する。一つは，非文法的である。もう一つは，文としては，成り立っているが，意味的に変わったり，または，文脈をみると，おかしくなったりするものである。なお，本稿で，置き換えにくいと判定した例は，50%以上の回答者と語学専攻の研究者の一致した判断によるものである。

airiti

まず，(5)の「慌しい」のように形容詞や，(6)の「大学生」のように名詞がくる場合は，非文となる。

(5)＊このところの私は，会社の合併で雑用が増え，{ついに／とうとう}慌しい。

（作例）~~我已将{ついに／とうとう}、慌しい、（作例）　的部分往前移動並加句點~~

(6)＊三浪した彼は｛ついに／とうとう｝大学生だ。[9]（作例）

(5)の「慌しい」は「事が多くてせわしい」状態を表す形容詞で，(6)の「大学生」は身分・職業を表す名詞である。これらは，時間的限定性がないという点で共通している。もし，(5)を「慌しくなった」に，(6)を「大学生になった」[10]に換えると，「なった」の働きによって，時間的限定性を持つ一時的な現象となるため，許容度が上がる。同じことは，次の(7)を説明できる。

(7)　バブルの影響でその会社は｛ついに／とうとう｝倒産だ。（作例）

(7)の「倒産」は，「倒産した」の意味で用いられており，それ自体には時間的限定性があるので，非文とならない。このように使用できる場合の名詞は，いわゆ

格式化: 字型色彩: 紅色

格式化: 字型色彩: 紅色

格式化: 不加底線

格式化: 縮排: 凸出: 1.49 字元, 左 3 字元, 第一行: -1.49 字元

格式化: 字型: (中文) 新細明體, (中文) 中文 (台灣)

9　「三浪した彼は，とうとう~~（我已在「とうとう」這個字下加底線）~~大学生だ」を「三浪した彼も，とうとう~~（我已在「とうとう」這個字下加底線）~~大学生だ」にすると，許容度が上がる。「三浪した彼も，とうとう~~（我已在「とうとう」這個字下加底線）~~大学生だ」には，「一浪して，二浪して，そして三浪もしたにも関わらず，4 度目の受験で見事に合格してやっと大学生になれた」や，「一浪や二浪で合格した人もいて，彼の場合は三浪までしてやっと合格して大学生になれた」といった二通りの解釈がある。前者は，「三浪した彼はまた浪人？」や「三浪した彼はどうなったか。」という質問に対する答えの解釈であるが，後者は，「医大の受験は難しいのか。彼の場合はどうだった？」という質問に対する答えの解釈である。どちらも，先行する文脈によって，時間的限定性が生じるので，許容度が高くなる。また，「三浪した彼も，今年はとうとう~~（我已在「とうとう」這個字下加底線）~~大学生だ」にすると，非文とならない。それは，「今年」という時間的限定性を持つ補語がついているからである。

10　「三浪した彼は，とうとう~~（我已在「とうとう」這個字下加底線）~~大学生になった」と言い換えられるのは，「三浪した彼はどうなったか。」という質問が前提となっているからである。

格式化: 字型色彩: 黑色

airiti

る出来事性を持つ名詞である。

動詞の場合は，(8)～(10)のように形容詞的な性格を持つ動詞がくると，非文となる。

(8) ＊彼の話は｛ついに／とうとう｝馬鹿げている。（作例）

(9) ＊新築家屋は｛ついに／とうとう｝国道に面している。（作例）

(10) ＊悪い癖が｛ついに／とうとう｝父に似ている。（作例）

(8)の「馬鹿げている」は特性を，(9)の「面している」は空間的配置動詞を，(10)の「似ている」は関係を表す動詞である[11]。このように特性・関係などを表す場合は，時間的限定性を持たない。

(5)(6)，また(8)～(10)をみると，いずれも時間的限定性を持たない，という点で共通している。これらが非文となることから，「ついに」「とうとう」にとって時間的限定性は必要なカテゴリーである，と言える。よって，以下からは，時間的限定性を持つ述語の場合を考察していく。

まず，(11)のような動詞がくることはできないが，(12)(13)のような動詞がくることはできる。

(11) ＊逃亡者が｛ついに／とうとう｝港にいた。（作例）

(12) a　建築家はありとあらゆるありったけの脳味噌をしぼりつくして考えぬき，ついにある方法にたどりついた。（ブン）

b　そんなことを言い合ううちにも祭礼の日は近づいて，とうとう宵宮の当日になった。（崩落）

(13) a　沢の一生を誤らせたのは，全く自分の仕わざであると心責められて，ついに彼は家出をした。（塩狩峠）

註解 [U4]: 我已將整句往前移動一字

註解 [U5]: 我已將整句往前移動一字

註解 [U6]: 我已將整句往前移動一字

註解 [U7]: 我已將整句往前移動一字

11 特性・空間的配置動詞・関係を表す動詞は，工藤（1995）で言えば，いわゆる静態動詞である。

airiti

b　娘は，源氏の身分や，自分の身分を思ったりすると，なお気おくれして恥ずかしく，しまいに，気分が悪いといって横になってしまった。入道は困ってとうとう自身で返事を書いた。（新源氏）

「いる」は「存在」を表す動詞，工藤（1995）で言えば静態動詞に属するものであるが，(11)の「いた」のように，一時的な状態を表し，時間的限定性を持つ場合がある。(12)(13)における動詞は，動作・変化を表す運動動詞である[12]。これらの動詞は，「運動性」を持つかどうかという点で異なっている。つまり，(11)は「運動性」を持たないという点で(12)(13)と大別されている。(11)は非文となるが，(12)(13)は非文とならない，ということから，「運動性」を持つことが重要であると言える。

また，(12a)の「たどりついた」や(12b)の「なった」は，運動内部の時間的限界を持つ内的限界動詞であるが，(13a)の「した」や(13b)の「書いた」はそれを持たない非内的限界動詞である，という点で大別されている。(12a)の「たどりつく」や(12b)の「なる」のような動詞は，それ自体の持っている語彙的意味に限界性があることによって，時間的限定性を持つが，(13a)の「する」や(13b)の「書く」のような動詞の場合では，その限界性はないが，「した」形といった完成相によって，時間的限定性が生まれる。いずれも，(12)(13)のように，「した」といった完成相と共起して，時間的限定性を持つようになる。このようにみると，時間的限定性を持つ場合は，動詞自体が「限界性」を持つことも重要であると考えられる[13]。このことは，次の(14)(15)のように感情を表す動詞や，(16)(17)のように運動動詞が「し

12 動作・変化を表す運動動詞は，工藤（1995）で言えば，外的運動動詞である。

13 動詞自体の「限界性」の有無について，工藤（1995）で言えば，外的運動動詞の中での主体動作・客体変化動詞と主体変化動詞は「限界性」を持つが，内的情態動詞，静態動詞，外的運動動詞の中での主体動作動詞は持たない。一方，Vendler（1967）の動詞の四分類で言えば，到達動詞と達成動詞は「限界性」を持つが，状態動詞と活動動詞は持たない。

格式化: 間距 套用後: 0.5 行

格式化: 字型色彩: 黑色

格式化: 間距 套用後: 0 pt

註解 [U8]: 我已將此部分改成 MS 明朝体

格式化: 字型色彩: 黑色

格式化: 字型色彩: 黑色

airiti

た」形ではなく，「している」形と共起すると，非文となる，ということからも反映されている。

(14) ＊病人は｛ついに／とうとう｝苦しんだ。（作例）

(15) ＊彼は｛ついに／とうとう｝悩んだ。（作例）

(14)の「苦しんだ」と(15)の「悩んだ」のように人の内面的な気持ちを表す感情動詞[14]は，「限界性」を持たないことで共通している。もし，(14)の例を「なかなか病状が悪化しなかった病人は｛ついに／とうとう｝苦しんだ。」に換えると，許容度が高くなる。それは，たとえば「死んでほしい病人の病状がなかなか悪化しなかったので，薬を投与した結果，やっと苦しみはじめた」というような状況を設定すれば，その「限界性」が外部から観察できるからである。このように「限界性」を持たない感情動詞で表される例は，時間的に限界づけられる要素を与えないと，非文となる。

(16) ＊大怪我から復活した彼は，ファンの声援に助けられながら，｛ついに／とうとう｝東京国際マラソンを走っている。（作例）

(17) ＊長い間難病を患っていた老母は｛ついに／とうとう｝死んでいる。（作例）

(16)の「走っている」は「走る」という動作が均質的に継続していることを指すが，(17)の「死んでいる」は「死ぬ」という変化が起こったあとの状態が継続していることを指す。これらは，時間的に限界づけられていない，という点で共通している。このように「している」といった継続相と共起すると，非文となることから，「限界性」を持つことが重要であると言える。

このように見ると，「ついに」「とうとう」を用いる文には「運動性」「限界

14 このような感情動詞は，工藤（1995）の言ういわゆる内的情態動詞である。

註解 [U9]: 我已將整句往前移動一字
格式化: 間距 套用後: 0.5 行
註解 [U10]: 我已將整句往前移動一字
格式化: 間距 套用後: 0 pt
註解 [U11]: 我已將此部分改成 MS 明朝体
格式化: 左右對齊
註解 [U12]: 我已將整句往前移動一字
註解 [U13]: 我已將整句往前移動一字
格式化: 分散對齊

airiti

性」を持つことが必要であると言える。その「限界性」は，限界性を持つ述語や補語や，「した」といった完成相との共起によって生じたものである。ただし，限界性を持つ場合に，開始限界と終了限界のどちらをさすかは，(18)～(20)のように動詞の語彙的意味や補語によって決まると考えられる。

(18)　なかなか決断できなかった松坂大輔が｛ついに／とうとう｝メジャー・リーグへ渡った。（作例）

(19)　（実況中継で）最長コースのマラソン先頭選手たちが｛ついに／とうとう｝橋を渡った。（作例）

(18)では，「松坂大輔がメジャー・リーグへ渡った」ことは，「ついに」「とうとう」と共起すると，「入団した」という意味で捉えられて，終了限界の局面を指すと思われる。一方，(19)では，実況中継で，「最長コースのマラソン先頭選手たちが橋を渡った」と耳にした場合，「最長コースのマラソン先頭選手たちが橋を渡り始めた」という読みも取れるし，「最長コースのマラソン先頭選手たちが橋を渡り終わった」という読みも取れる。このようにみると，「渡る」のような限界性を持つ動詞は，「ついに」「とうとう」と共起すると，終了限界を指すのが普通であるが，(19)のように開始限界を指すこともありうる，ということが言える。それに対して，限界性を持たない動詞の場合は，終了点がないので，開始限界を指すことになる。次の(20)がその例である。

(20)　長く沈黙していた彼女は｛ついに／とうとう｝言った。（作例）

「言う」は，終了限界を持たないので，開始限界の読みが取れる動詞であると思われる。だが，(20)のように「した」形との共起や，次の(20’)のように「～と言う」の形で表す場合は，終了限界を指すことも考えられる。

(20’)　長く沈黙していた彼女は｛ついに／とうとう｝「ほんのすこしの間，お金を貸してください」と言った。

このように，限界性が明瞭でない場合は，「した」形や「してしまう」形などの

airiti

ような完了の意味を持つ形式や，内容を示す「と」と共起すると，終了限界を指すことになる。

以上のように，時間的限定性の観点からみると，「ついに」「とうとう」を用いる文は，アクチュアル[15]な事態を表すと言える。

3.2　アスペクトの観点から

アスペクトの観点からみると，次のようになる。

まず，習慣またはポテンシャルな事態[16]を表す場合をみると，(21)(22)のように，非文となる。

(21)＊先生は手に負えなくなり，いつも｛ついに／とうとう｝悪童を無視する。（作例）

(22)＊不良たちはしつこく注意され，いつも｛ついに／とうとう｝補導員と言い争いになっている。（作例）

(21)(22)のように，習慣を表す「いつも」と共起すると，文末の述語を「する」形にしても「している」形にしても非文となる。このことから，両語は一回限りの出来事を表す副詞であると言える。

完成相で表す場合は，(23)のように「する」形でなく，(24)のように「した」形を使うのが普通である[17]。

(23)＊おじいさんは，長年癌と戦っていて，｛ついに／とうとう｝亡くなる。

---

15 本稿では，アクチュアル（actual）とは，「現実の，現実に存在している，実際の，実際に起こった」という意味を指す。

16 ポテンシャル（potential）とは，本稿では，「可能性がある，潜在的な」という意味を指す。

17 文末の述語を「した」形で表す実例は，「ついに」では，315 例の中の 276 例（全体の 87.62%）あり，「とうとう」では，332 例の中の 311 例（全体の 93.67%）ある。この数字から，「した」形が多く用いられていることが言える。

airiti

（作例）

(24) a 「だれか，玩具のはじきでももってないのか？」と侯爵がついに沈黙の封印を切った。（聖少女）

b 郷愁が胸にあふれて，ついには涙ぐんでしまいたいほど，おかしな気持だった。加藤は汽車が浜坂の近くになると，とうとう座席から離れた。（孤高）

(23)のように「する」形を用いると，非文となるが，(24)のように「した」形を用いると，非文とならない。このことから，両語は完了した出来事を表す語であると分かる。ただし，「する」形で表しても，次の(25)のように用いることができる場合もある。

(25) 何度も失敗を重ねた研究が｛ついに／とうとう｝完成する。（作例）

(25)の「何度も失敗を重ねた研究が｛ついに／とうとう｝完成する」は，発話時点から遠くない未来のことを述べる文である。その何度も失敗を重ねた研究は，発話時点において既に完成度が高く，その時点からあまり遠くない未来に完成できる，と予測できるので，非文とならない。このように，出来事が未来の時点においても実現する可能性が高い場合は，「する」形で表すことができる。それは，話し手にとっては，完了した出来事として認識しているからである。

「している」形で表す場合は，パーフェクト的意味を表す。

(26) ＊彼は事故で足を怪我したが，リハビリを重ね，–｛ついに／とうとう｝元気に歩いている。（作例）

(27) a 一同は取ったブロマイドを見せあった。玉錦，武蔵山，男女ノ川，清水川，鏡岩，それに昨今は日の出の勢いの双葉山などであった。残念なことに蔵王山の写真はある筈もなかった。蔵王山はその後，脊椎をも傷め，休場を繰返し，ついに序二段にまで陥落していた。（楡家）

註解 [U14]: 我已將此句空一字（全形）

格式化: 分散對齊

airiti

b　円安が続き，とうとう100円台を切っていた。（作例）

(26)のように，限界性を持たない動詞の場合は，動作継続を表す「している」形で表すことはできない。それは，均質的に持続している動作・変化には終わりがないからである。また，(27)のように，限界性を持つ動詞で表す場合は，「ついに」「とうとう」を取ると，その「している」形は結果継続を表すが，「ついに」「とうとう」がつくと，パーフェクト的意味に移行すると考えられる。それは，変化したあとの結果状態には終わりがないが，「ついに」「とうとう」がつくことによって，限界性が生まれ，パーフェクト的意味に移行するからである。

始動相と終結相と共起する場合は，次のようになる。

(28) a　この戦場では予備隊の多寡が勝敗を決定するであろうことを信長はみていた。ついに五番備えの森可成の隊までが崩れ立ちはじめた。（国盗り）

b　二百メートルあたりの所で二人は頭のてっぺんから爪先まで，全くの濡れねずみとなった。そのお互いの姿を眺めあって，とうとう二人は笑い出した。（電話）

(29)　何ヶ月もかかって，｛ついに／とうとう｝『君主論』という本を読みおわった。（作例）

(30)　何時間も泣いていた子供は｛ついに／とうとう｝泣きやんだ。（作例）

(31) a　「俺が言ったんじゃないよ。みんなが言ってるんだ。」建太はあわてて弁解した。そのあわてぶりが，おかしい。正直なヒト――ほころびかけた顔を無理にしかめっ面にして，令子は言った。「建太の目も言ってるッ」「今夜，ぜったいに遅れない」とうとう令子は笑ってしまった。（あした）

b　「たのむ，助けてくれ！……どんなことでも，約束する！……おねがいだから，助けてくれよ！……おねがいだ！」ついに男は，泣き出してし

註解 [U15]: 我已將此句空一字（全形）

註解 [U16]: 我已將此句空一字（全形）

格式化: 縮排: 左: 0.99 字元, 凸出: 4.35 字元, 第一行: -4.35 字元

註解 [U17]: 我已將此句空一字（全形）

airiti

まった。（砂の女）

(28)のように，「しはじめる」「しだす」といった始動相と，(29)のように「しおわる」や，(30)のように「しやむ」や，(31)のように「してしまう」といった終結相と共起することはできる。そのうち，終結相を表す「してしまう」と共起するものは，「とうとう」では，332 例の中の 85 例（全体の 25.60%）あり，「ついに」では，315 例の中の 41 例（全体の 13.02%）ある。このことから，「してしまう」と共起する場合の「とうとう」は「ついに」より多いと言える。

以上のように，習慣を表す「いつも」と共起できないこと，「した」形といった完成相と共起しやすいこと，実現する可能性が高い場合は「する」形で表すことができること，パーフェクト相で表すことができることなどといった現象から，「ついに」「とうとう」は，非アクチュアルな事態（習慣やポテンシャルな事態）ではなく，アクチュアルな事態を表す語であると言える。

3.3　モダリティの観点から

文末の意志，勧誘，命令，禁止といったモダリティ表現との共起を見ると，「ついに」「とうとう」のどちらにもくることはできない。

(32)＊散々迷って｛ついに／とうとう｝決断しよう。（作例）

(33)＊台風が来るので，｛ついに／とうとう｝雨漏りをみんなで修理しよう。（作例）

(34)＊先生とよく相談して，｛ついに／とうとう｝決めろ。（作例）

(35)＊｛ついに／とうとう｝逆切れするな。（作例）

(32)の意志，(33)の勧誘，(34)の命令，(35)の禁止を表す文は，実現されていない事態を表す点で共通している。これらは，非文となることから，「ついに」「とうとう」を用いる文は，実現した事態を表すと言える。ただし，予定などのように，事態の実現が確立している場合は，未来の時点においても用いることはできる。

airiti

(36)　今年の秋，パソコン会社は，｛ついに／とうとう｝新しいソフトの発売をする。（作例）

(36)では，「発売する」という予定の決定を，発話時点においては，既に実現した事態として捉えているので，非文とならない。

以上の現象から，「ついに」「とうとう」を用いる文は，一回限りの確実性の高い出来事，つまりレアル[18]な事態を表すと言える。

3.1～3.3 をまとめると，「ついに」「とうとう」を用いる文は，時間的限定性からみると，アクチュアルな事態を，レアリティー[19]の観点からみると，レアルな事態を表すと言える。それは，いずれも両語の持っている「進行してきた物事が，様々な過程を経て最終的にまとまりをつける」といった特徴と関わっていると考えられる。

4. 意味的な特徴から見た「ついに」「とうとう」

「ついに」と「とうとう」の相互の意味の類似点・相違点を考察すると，次のような特徴が見られる。

A．「ついに」「とうとう」は共に文脈や補語によって導かれた最終局面を表す副詞である。ただし，その最終局面は，出来事が実現したことを表す場合もあれば，実現しないまま終わってしまったことを表す場合もある。

(37) a　長野は十五歳で姿を現わした大場という少年に夢を託し，ジムに引き取り，注意深くボクサーとして育て上げ，ついに世界チャンピオンにまですることに成功した。（一瞬）

註解 [U18]: 我已將此句空一字（全形）

格式化: 分散對齊

18 本稿では，レアル（real）とは，「時間の中に現実化している具体的現象」という意味を指す。

19 本稿では，レアリティー（reality）の観点からみると，既に実現した事態をレアルな事態と言い，実現する可能性のある事態をポテンシャルな事態と言う。

airiti

b 二種類の紙をひろいわけ，底紙は底紙で，梯形の紙は梯形の紙でひとまとめにするのであるが，紙は双方何百枚となくまじりあっていて，とても妻ひとりの手には負えない作業であった。「ねえ，すみませんけど，手があいてたら，ちょっと手伝ってくださらない？」妻はとうとう悲鳴をあげた。（忍ぶ川）

(37a)の「世界チャンピオンにまですることに成功した」ことは，長野が大場という少年に夢を託して，注意深くボクサーとして育てあげてきた結果である。(37b)の「妻は悲鳴をあげた」ことは，妻一人の手に負えない，紙の複雑な仕分け作業に対して，妻が我慢し切れずに助けを求めた結果である。この二例は，どちらも出来事が実現した最終局面を示す例である。それに対して，

(38) a お松の宝物――。家じゅうで，それは知らぬ者のない小さな観音像だった。…（中略）…。それが紛失したというのだから，一大事だ。総出で，下女部屋の畳まであげてさがしたのに，ついに出ない。（たもと）

b 一行を心先院まで案内してまた勢州は，ここまで見とどけ，聞きとどけると，（よかった，これでよい，これでよい）ひとりうなずいて，こっそり家臣らの群れからぬけ出した。…（中略）…。晩年の平穏も目に見えていたが，物乞いにまで堕ちた身を恥じて，彼は姿をくらましたのである。越中守がさがさせ，もとの松平信三郎にもどった智昌も，今は小姓にとりたてられてすっかり満足し，身持も改まった吉之助に命じて，江戸中をさがさせたが，行方はとうとうわからなかった。（たもと）

(38a)は，「紛失したお松の宝物（小さな観音像）は総出で，下女部屋の畳まであげてさがしたが結局見つからなかった」という意味を表す。(38b)は，「勢州の行方を探すことは江戸中をさがさせたが見つからないまま終わってしまった」という意味を表す。この二例は，どちらも望んでいたことは実現できないまま終わってしまったということを表すものである。

註解 [U19]: 我已將此句空一字（全形）

註解 [U20]: 我已將此句空一字（全形）

格式化: 分散對齊

註解 [U21]: 我已將此句空一字（全形）

格式化: 分散對齊

airiti

このようにみると，「ついに」「とうとう」は，補語や文脈によって導かれる最終局面を表すこと，またその最終局面は，望んでいたことが実現されたことを表す場合もあれば，実現されないまま終わってしまったことを表す場合もある，という点でも共通している，と言える。

B. どこに焦点を当てるかをみると，「ついに」は出来事の最終局面に，「とうとう」は最終局面に至るまでの過程に焦点が置かれる，という点で異なっている。

どこに注目が置かれるかについては，次の(39)(40)のように置き換えられない例を見ると，両語の違いがわかる。

(39) 遠国については，山伏，歩き巫子，御師，放下僧，くぐつ師，など旅を人生としている者を座敷に泊めては，話をきいていた。諸大名の能力，性癖，家老の人物，さらに家政の乱れ，整頓ぶり，それらをこまかくしらべあげ，（はて，どの国がよいか）と，考えぬいてきた。ついに｛＊とうとう｝，「美濃」ときめた。（国盗り）

(40) それで警察としてはやむを得ず，次官官舎の向いの霊南坂教会に一と部屋を借り，そこへ入った巡査が官舎の門番と連絡を取り，山本が出かけるとか帰って来るとかいう時には，外にいる数人の巡査でそれとなく道の要所々々を見張って歩くようになった。いやがっていた憲兵も，そのうちとうとう｛＊ついに｝つくことになった。（五十六）

(39)では，先行文脈の「諸大名の能力，性癖，家老の人物，さらに家政の乱れ，整頓ぶり，それらをこまかくしらべあげ，（はて，どの国がよいか）と，考えぬいてきた」があるので，「その結果～」という意味合いにとれる。(39)が「とうとう」に置き換えにくいことから，「決めた」「決断した」「判明した」「分かった」のような最終的にどうしたかを表す語と共起する場合は，「とうとう」より「ついに」の方が許容度は高くなると言える。一方，(40)では，「そのうち」をは

airiti

ずすと，「嫌がっていた憲兵もついに護衛につくことになった」という意味の文となり，許容度があがる。「ついに」に置き換えにくいのは，過程を表す「そのうち」があるからである。このことから，「ついに」は，出来事が実現した時点に注目する語であると言える。

このように見ると，「ついに」「とうとう」について考えるとき，出来事が実現した最終局面までのことをどのように捉えるのかについて考える必要があると言える。つまり，「ついに」は出来事が実現した最終局面に，「とうとう」は最終局面に至るまでの過程に焦点を当てる，ということが重要である。このことは，次の(41)(42)も説明できる。

(41)　何度も改良してきた新商品が｛○ついに／○とうとう｝完成した。これからやっと店頭販売できる。（作例）

(41)では，「ついに」を用いると，商品そのものが完成したということに焦点が当たるが，その商品についての計画，たとえば立案から販売までのプロセスは含まれていない。それに対して，「とうとう」を用いると，商品についての計画を立てて，アイディアの立案から改良までのプロセスを経てようやく店頭販売できる状況になったという意味合いに取れる。つまり，「ついに」を用いると，出来事が最後に終わった，という意味に取れるのに対して，「とうとう」を用いると，出来事が終わるまでの過程を含めて完了する，という意味に取れる。それは，「ついに」は名詞「つい（終）」と助詞「に」によって作られてきたものであるためと考えられる[20]。また，

(42)　そういったのが公子だったので，みなは一瞬はっとした。伍堂がそれに対してすぐ返事をしなかったので，一層妙な空気になった。伍堂は公子と，

20 『日本国語大辞典(第二版)』（200~~1~~0-02）は，「ついに」について，「名詞「つい（終）」に助詞「に」がついてできたもの」とし，また「行為や状態が，最終的に実現するさまを示す。」ともしている。

airiti

そして千果はとうとう｛〇ついに｝高倉と二人になった。千果は高倉と並んで歩きながら，この期を逃してはならぬ，という緊張と焦慮で胸が騒いでならなかった。（華燭）

（42）（前掲の(4)）では，「千果は高倉と並んで歩きながら，この期を逃してはならぬ，という緊張と焦慮で胸が騒いでならなかった」ことから，「千果は高倉と二人になってそれから何かしたいことがある。」という読みが取れる。つまり，「とうとう」を用いると，「二人になって何かをしたい」までのことが読み取れる。一方，「ついに」も用いることはできるが，「二人になることが最終目的である」という読みになる。

このようにみると，「ついに」「とうとう」は，補語や文脈によって導かれる最終局面を表す，という点で共通しているが，「ついに」は出来事の最終局面に，「とうとう」は最終局面に至るまでの過程に焦点を当てると言える。このことについては，長嶋（1982），森田（1989），飛田・浅田（1994），福島（1997），グループ・ジャマシイ（1998），李（2000），金（2006）でも言及されている。

C．最終局面に至るまでのプロセスに話し手の心的態度が出てくるかどうかをみると，両語は，ともに「紆余曲折」という心的態度を読み取ることができる。ただし，その「紆余曲折」という心的態度は，「とうとう」は「ついに」より強く現れる。

両語は，ともに(43)～(45)のように含まれているものもあれば，(46)のように「紆余曲折」という意味が含まれていないものもある。

（43）a 内藤はその子が生まれてくるまでに，どうしても生活のメドを立てなくてはならなかった。延期，延期が繰り返され，いつになるかわからない試合を当てにし，無収入のまま子供が生まれるのを待つ，というわけにはいかなかった。東洋戦の決着がつくまではと我慢に我慢を重ねていたが，ついに我慢しきれず内藤は再び水商売の世界に入っていった。（一

註解 [U22]: 我已將此句空一字（全形）

airiti

瞬）

b　私は女が，私と会ったという運命に，何かの予感を感じてくれることをのぞんでいた。世界の没落に手を貸しているという意識に，少しでも近づいてくれるようにのぞんだ。それは女にとっても，どうでもよいことではない筈だと私は考えた。こうした焦慮のあげく，とうとう言うべきでないことを私は言った。（金閣寺）

(44) a　火は新聞紙に燃えうつり，たきつけの薪を半分ほどこがしたところで消えた。濛々と煙が上った。宮村と加藤は一時間ほど煙と戦ったが，ついに火はつかなかった。（孤高）

b　ニューオリンズ観光の中心地であるフレンチ・クォーターは，アリ戦の客でどのホテルも満員だった。ニューオリンズでもいっさい予約をしていなかった私は，空部屋の有無を一軒一軒たずねてまわっているうちに，とうとうフレンチ・クォーターのはずれの，小さく薄暗いホテルに泊まることになってしまった。（一瞬）

(43a)の「東洋戦の決着がつくまではと我慢に我慢を重ねていた」と(43b)の「こうした焦慮のあげく」は程度の深さ，(44a)の「一時間ほど」と(44b)の「空部屋の有無を一軒一軒たずねてまわっているうちに」は時間の長さが表されている。これらは，程度的・時間的にかかった苦労や困難などの状況を示している。このような状況は，(43)(44)のように，文中に現れた補語によるものもあれば，次の(45)のように，文脈によるものもある。

(45) a　健康診断を受けたあとで，私は内藤と共に外へ出た。写真を撮りに来ていた利朗も一緒に探しに出てくれた。通ってきた道を辿り返し，地面を探しながら歩くが，もちろん指輪などが簡単に見つかるはずがない。ついに水道橋の駅まで来てしまった。（一瞬）

b　観賞用植物の植木がふんだんにあって，そこから発散されるオゾンが濃

註解 [U23]: 我已將此句空一字（全形）

格式化: 分散對齊

註解 [U24]: 我已將此句空一字（全形）

註解 [U25]: 我已將此句空一字（全形）

格式化: 加寬 0.2 pt

註解 [U26]: 我已將此句空一字（全形）

註解 [U27]: 我已將此句空一字（全形）

airiti

かった。乃里子は次第に息苦しくなっていった。「あの……」とうとう彼女はたまりかねて言った。（女ざかり）

(45a)の「通ってきた道を辿り返し，地面を探しながら歩くが，もちろん指輪などが簡単に見つかるはずがない」と(45b)の「次第に息苦しくなっていった」は，それぞれの最終局面を導く先行文脈である。それに対して，

(46) a ある朝，雪が蔵王の山頂近くをはだらに彩っているのが見える。その白いものはだんだんと近寄ってくる。そしてついにある日，里にもそれは降ってくる。（楡家）

b 向うが立ちそうにしたので，私はあべこべにのろのろしていた。立つときをずらせて，水野と一緒にならないようにしようと思った。あの男と会うのは，こっちの元気のよいときだけにかぎる。とうとう，彼らはナプキンをおいて席を立った。（言い寄る）

(46a)の「ある日，里にもそれは降ってくる」と(46b)の「彼らはナプキンをおいて席を立った」は，「紆余曲折」のような心的態度がなく，単に出来事の最終的な結果を表すものである。この場合は，「けっきょく」に置き換えることが可能である。

以上のことから，補語や先行文脈によって表される，空間的・程度的・時間的にかかった苦労や困難などの状況により，紆余曲折といった心理的な態度が生じてくると言える。その比率をみると，「とうとう」では 332 例の中の 289 例（全体の 87.05%）あり，「ついに」では，315 例の中の 245 例（全体の 77.78%）ある。このことから，「とうとう」は「ついに」より高いと言える。

D．最終局面まで導かれる兆しがあるかどうかを見ると，「とうとう」は「ついに」より感じられる。

(47) 傘も持たず，雨に濡れながら，行き交うタクシーに盛んに手を振るのだが，一台も止まってくれない。それでも諦めず，なおも手を振っていると，つい

註解 [U28]: 我已將此句空一字（全形）

註解 [U29]: 我已將此句空一字（全形）

airiti

に｛＊とうとう｝ブルーの車が横づけにされた。喜び勇んで乗り込もうとすると，運転席から制服姿の警官が降りてきた。彼らはパトカーを止めてしまったのだ。（一瞬）

(47)は，「行き交うタクシーに盛んに手を振ることをしてきたが，止まってくれそうな車は一台もなかった。最後にブルーの車が横づけにされた」という意味を表す。その文脈から，車が止まってくれそうな兆しがない，ということが分かる。つまり，最終局面（車が止まってくれること）に至るまでの兆しがない。この場合は，「ついに」を「とうとう」に置き換えにくい。このことから，最終局面に至るまでに，何らかの兆しがある，という意味合いは，「とうとう」は「ついに」より含まれると言える。このことは，次の(48)(49)を説明できる。

(48)　台湾では長い間雨が降らなくて，給水制限が行われていたが，昨夜ついに｛＊とうとう｝待望の雨が降った。（作例）

(49)　さきほどから雲行が怪しいと思っていたが，雨がとうとう｛＊ついに｝降りだした。（作例）

(48)のように「待望の雨が降った」まで導いた兆しはないが，(49)のように「雨が降りだした」まで導いた兆しは「さきほどから雲行が怪しい」ということからわかる。(48)では「ついに」を「とうとう」に，(49)では「とうとう」を「ついに」に置き換えにくいことから，最終局面まで導いた何らかの兆しは，「とうとう」は「ついに」より読み取れる。それは，「とうとう」の持っている「最終局面までのプロセスに焦点を当てる」という特徴と関わっていると考えられる。

以上より，両語は最終局面を表す点で共通しているが，「とうとう」は，最終局面に至るまでのプロセスを強調すること，「紆余曲折」という心的態度は「ついに」より強く現れること，最終局面まで導かれる兆しは「ついに」より感じられることで，「ついに」と異なっている，と言える。

airiti

5. まとめ

ここまで述べてきたように，「ついに」「とうとう」を用いる文は，時間的限定性を持つ必要があること，習慣またはポテンシャルな事態を表さないこと，一回限りの確実性の高い出来事を表すことなどで，共通している。これらのことから，「ついに」「とうとう」は，時間的限定性の観点からはアクチュアルな事態を表し，レアリティーの観点からはレアルな事態を表す時間副詞である，と言える。

意味的な特徴においては，文脈や補語によって導かれた最終局面を表すことで共通している。だが，「ついに」は最終局面を強調するが，「とうとう」は最終局面に至るまでのプロセスを強調する点で異なっている。そこから，「紆余曲折」という心的態度は「ついに」より「とうとう」のほうが強く現れること，最終局面まで導かれる兆しは「ついに」より「とうとう」のほうが感じられることが生まれてくる。

このように，「進行してきた物事が，様々な過程を経て最終的にまとまりをつける」という意味を表す時間副詞は，「けっきょく」のように，単純に述べるものと，「ついに」「とうとう」のように，それに加えて話し手の心的態度が現れるものとに使い分けられると考えられる。このような副詞を体系化することは，教育現場においても使い分けの指導に役立つと思われる。

用例出典（本文中で「作例」と注記した例はネイティブによるものであり，アドレスが書かれたものはインターネットで調べたホームページ上の文例である。）

五十六＝阿川弘之『山本五十六』，一瞬＝沢木耕太郎『一瞬の夏』，金閣寺＝三島由紀夫『金閣寺』，国盗り＝司馬遼太郎『国盗り物語』，孤高＝新田次郎『孤高の人』，塩狩峠＝三浦綾子『塩狩峠』，忍ぶ川＝三浦哲郎『忍ぶ川』，新源氏＝田

格式化: 加寛 0.2 pt

格式化: 加寛 0.2 pt

airiti

辺聖子『新源氏物語』，砂の女＝安部公房『砂の女』，聖少女＝倉橋由美子『聖少女』，楡家＝北杜夫『楡家の人々』，華岡＝有吉佐和子『華岡青洲の妻』，ブン＝井上ひさし『ブンとフン』（以上は，『ＣＤ-ＲＯＭ版　新潮文庫　100 冊』（新潮社 1995）によるものである。）あした＝内館牧子『あしたがあるから』角川書店（1997），言い寄る＝田辺聖子『言い寄る』文藝春秋（1978），隠々洞＝杉本苑子『隠々洞ききがき抄』文藝春秋（1992），女ざかり＝森瑤子『女ざかり』角川書店（1994），華燭＝津村節子『華燭』中央公論社（1985），たもと＝杉本苑子『橋のたもと』集英社（1992），電話＝森瑤子『あなたに電話』中央公論社（1991），崩落＝杉本苑子『永代橋崩落』中央公論社（1992）。

参考文献

池田英喜「「ツイニ・トウトウ」小考」，『新潟大学留学生センター紀要』2 号，新潟大学，2000。

大里泰弘「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」，『九大言語学研究室報告』7 号，九州大学，1986。

奥津敬一郎『「ボクハウナギダ」の文法』，東京：くろしお出版，1993。

金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法２　時・否定と取り立て』，東京：岩波書店，2000。

金英児「現在の実現に関わる時の副詞―「ついに」・「とうとう」を中心に―」，『日本文化学報』30，韓国：韓国日本文化学会，2006。

工藤浩「日本語の文の時間表現」，『言語生活』403 号，東京：筑摩書房，1985。

―――「副詞と文の陳述的なタイプ」，『日本語の文法３　モダリティ』，東京：岩波書店，2000。

工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテクスト』，東京：ひつじ書房，1995。

airiti

――――――「現象と本質―方言の文法と標準語の文法」，『日本語文法』2 巻 2 号，東京：くろしお出版，2002。

――――――『日本語のアスペクト・テンス・ムード―標準語研究を超えて』，東京：ひつじ書房，2004。

グループ・ジャマシイ『日本語文型辞典』，東京：くろしお出版，1998。

国立国語研究所『現代日本語動詞のアスペクト・テンス』，東京：秀英出版，1985。

小矢野哲夫「副詞の呼応」，渡辺実（編）『副用語の研究』，東京：明治書院，1983。

小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典(第二版)』~~第 2 版~~，東京：小学館，2000~~-02~~1。

寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』，東京：くろしお出版，1984。

長嶋善郎「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」，國廣哲彌（編）『ことばの意味 3 辞書に書いてないこと』，東京：平凡社，1982。

仁田義雄『日本語のモダリティと人称』，東京：ひつじ書房，1991。

――――『副詞的表現の諸相』，東京：くろしお出版，2002。

日本語教育　誤用例研究会（著）佐治圭三（監修）福島泰正（編）『類似表現の使い分けと指導法』，東京：アルク，1997。

長谷川信子『生成日本語学入門』，東京：大修館書店，1999。

飛田良文・浅田秀子『現代副詞用法辞典』，東京：東京堂出版，1994。

益岡隆志『日本語モダリティ探究』，東京：くろしお出版，2007。

森田良行『基礎日本語辞典』，東京：角川書店，1989。

李建華「副詞「ついに」「とうとう」「やっと」「ようやく」の異同について」，『茨城キリスト教大学紀要』第 34 号，茨城キリスト教大学，2000。